

## 夏越大祓

日付：6月30日

多くの神社では、6月末に、その年の上半期に蓄積された不浄なものを清め、残りの下半期の健康を願うため、祓の儀式を行います。上賀茂神社は、人から「ひとがた」と呼ばれる紙人形へ不浄なものを移すなど、独特な祓の仕方で行われています。6月30日の日没後、夏越大祓（大きな夏のお祓い）の儀式の際、神職は律動的に祈りを唱えながら、かがり火で照らされた橋殿から、ならの小川へ紙人形を流します。

6月30日には、上賀茂神社でいくつかの儀式が行われます。日中には、神職が大きな茅の輪をくぐり、橋殿で身を清め、そして本殿（主な御殿）で賀茂別雷大神に捧げ物をして祈ります。午後8時に夏越大祓が始まると、神職が再び橋殿に集まります。かがり火の明かりが流れる水面を照らし、伝統的な楽器の音が境内に鳴り響きます。読み手の一人は前進し、公家であり歌人であった藤原家隆（1158～1237）が書いた上賀茂神社での夏越大祓を詠んだ和歌を詠み上げます。和歌は次のようなものです：「風そよぐ ならの小川の夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける」。

続いて、二人の神職が橋殿の端に座り、事前に箱に集めたひとがたという紙人形を次々と下の小川に素早くはじき、他の神職はお清めの祈りを唱えます。この人形が流されてゆくにつれ、人の不浄なものを一緒に持って行く信じられています。その後、一人の神職が神聖な榊の木の枝を振って、儀式を見るために集まった人々を清めます。夏越大祓について詠んだもう一首の和歌が詠まれた後、神職は自らのひとがたを小川に流して立ち去り、残された燃え尽きそうなかがり火は夜の闇にちらつきま

す。

ひとがたという紙人形をお清めの儀式のために提出するには、人々はこの紙人形に名前と年齢を書いて、そしてそれらを胸の左側、右側、中央にかざし、最後にこの紙へ息を吹きかけます。こうして、このひとがたは提出した人の不浄なものの器となり、これが洗い流されていく時、この人形は象徴的に不浄なものも共に持っていきます。近年、交通安全を祈願する人のために、車の形をした紙も取り入れられました。ひとがたは5月中旬から6月の終わりまで上賀茂神社へ事前に提出することができます。夏越大祓の当日は、ひとがたを撒く儀式が終わるまで、提出が受け付けられています。

同じ儀式は12月末にも行われ、7月以降に溜まった不浄なものを清め、翌年の健康を祈願します。